

平成 22 年度研究チーム活動中間報告（第 2 回目）

「平生鈞三郎におけるイギリス的伝統」

No.117 研究幹事 中島俊郎（文学部）

平生鈞三郎と伊藤長蔵

本学の図書館に寄贈された平生鈞三郎の蔵書は、きわめて興味深い人間関係とそこから派生する文化事象を伝えてくれる。

寄贈書の一冊に英語で書かれた、ゴルフ文献の稀覯書 *Golfer's Treasures* (London: St. Catherine Press, 1925) が架蔵されている。編纂者は伊藤長蔵であり、流布していた種々のゴルフ文献からの抜粋をあつめてゴルフ指南書としてのアンソロジーを編むために、ロンドン滞在中の伊藤が鋭意努力して紙質、印刷から造本まで神経を行きとどかせて編みあげたのが本書である。

「ゴルフは科学的なゲームであるがゆえに、科学でもって説明し、科学的に習得しなくてはならない」と序文において、雄弁に主張し、チャールズ・ダーウィンの孫であるバーナード・ダーウィンが「瞠目する熱意で本書を編む」伊藤のすがたを前書きに記している。

ただ、抜粋した文章が不幸にも著作権にふれるものがあり、絶版を余儀なくされたのであった。こうした経緯から編纂されたゴルフ本は稀覯書になってしまうのであるが、この本の出版は伊藤に出版業を開眼させる契機を与えたのであった。

長蔵は播磨の素封家である伊藤家の次男として生まれた。兄の貴族院議員である伊藤長次郎は西本願寺の大檀越で、その縁で長蔵は大谷尊由と英国へ同行し、ゴルフに親しむことになる。

そして揺籃期の関西ゴルフ界には日商の会頭になる高畑誠一がいたが、長蔵のロンドン滞在時、高畑は鈴木商店ロンドン支店長で、名門アディントンの会員でもあった。帰国後、広野ゴルフ場の設計を実現するために高畑が依頼したのが伊藤長蔵であった。伊藤はゴルフ雑誌や解説書を日本で初めて出し、日本ゴルフ界のパイオニア的な存在になっていく。

ゴルフ界に貢献したのと同様に、伊藤は昭和初期の出版界の輝く星でもあった。出版社「ぐろりあ・そさえて」を起し、顧問には新村出、亀田次郎、神田喜一郎、石田幹之助などの錚々たる人士を後立てとして出版事業をはじめたのであった。愛書趣味が横溢する出版物を数多く出したが、すでに創業したころ、現在も評価がゆるがない古典としてあおがれる著作を出している。

没後百年にあたる年に詩人にして版画家であったウィリアム・ブレイクの書誌を出そうという意図を新村に相談したところ、英文学者にして書誌学者である壽岳文章が適任であろうと推薦され、新村を介して壽岳と伊藤は京都大学の図書館長室で会うことになる。昭和四年に出版された大冊『キルヤム・ブレイク書誌』は、「世界最大のブレイク書誌」（『日本の英学一〇〇年 昭和編』）と称されている。壽岳文章はのちに甲南大学文学部英文科の礎を築くことになり、ここにも目に見えぬ糸が張りめぐらされているのを知るのである。

そしてもう一冊は、昭和三年に出た柳宗悦の『工藝の道』であり、「柳工藝美学の基本的文献」とうたわれる名著であるが、壽岳が柳に伊藤を紹介してこの出版は実現したのであった。平生鈞三郎旧蔵書には伊藤長蔵がぐろりあ・そさえてから定期的に出していた愛書雑誌『書物の趣味』も架蔵されていることも追記しておきたい。

平生鈞三郎の精神的形成をなしたイギリス文脈を考察するとき、表面的な影響関係よりも伏流水のように流れている文化的水脈を探るのもきわめて重大なのである。